南嶺遺稿

曽5
1
118
1

昭和
年
月
日

門 5
號 118
卷 1

秋齋桂先生著

# 南山頌遺稿

大阪　書肆　積玉圃
　　崇高堂



## 南嶺子遺稿序

物有不可言。或有不可不言。吾將以可言云之。以不可云不之。才也德也。不可不云。無士也

若德也。不可言者也。若才德並喪者。嗟乎著鮮矣。夫南嶺子才也可言。德也不可云。不可云而言者。謟焉。可言而不言者。妬焉。不妬而謟乎。獨南溟氣先生有寄。嘗題于南嶺子。亡何南嶺卒。門人華逝言拉此。殆俾于前荔。吾東方之典

故未幾于前篇去於此書間發焉若其才也嘗序乎前篇至茲生治矣亦未之知能殺因此書以德遠豈不



可云乎若夫南嶺去骨朽而言不朽門人見在于四方者若干人今也幸閱此書如面見嶺乎南嶺也

者其不拙哉

寛廣丁亥九月晦

良芸之撰

耕仙

# 南嶺遺稿

目録


一 尾州菊茶
二 大成弦神道
三 讀神紀故實
四 和歌熟字法
五 字餘之歌
六 吉祥草
七 繪馬武者絃
八 者之字
九 職原抄印板
十 壺井翁字問
十一 冨士之歌
十二 紅葉讀方
十三 歌會文臺
十四 宗匠家
十五 短冊
十六 呉竹

十七 和歌懐紙
十九 定家卿密歌
廿一 近世神軍傳
廿三 哥袋
廿五 俳諧体
廿七 哥之歌么
廿九 近世甲冑故實者
卅一 貞徳慰草
卅三 詠歌大概
卅九 清の字

十八 和歌之師
廿 觀古歌
廿二 舟ら道么
廿四 枝折
廿六 視木
廿八 まゞり
卅 奴袴
卅二 手尓葉
卅四 宿紙
卅六 胡曹抄



卅七 村雨時節
卅九 神位
四十一 和歌風体
四十三 和歌慰勇笑之字
四十五 梅之假名
四十七 撰之字
四十九 狂哥
五十一 賀之哥
五十三 扉風雀形
五十五 大祓

卅八 懐紙詠字
四十 羽織の本義
四十二 書懐紙
四十四 領巾裙帶
四十六 汗衫
四十八 甲斐之字義
五十 唐士芝居
五十二 打鮑
五十四 七之数
五十六 七種柏子詞

五十七 豕之餅
五十九 蛭子尊像
六十一 黒塗燈臺
六十三 市所と限
六十五 十字
六十七 太子傳之誤字
六十九 神支灸を忌
七十一 神前散米
七十三 神支浴水
七十五 於神前不直沓
七十七 職原抄大臣不稱的之説
七十九 妙之字
八十一 神前忌毛氈
八十三 神前儀香花
八十五 古来暦学
八十七 十干之論
八十九 延喜式鋸之訓
九十一 厠字
九十三 圭筮
九十五 聖徳太子
九十七 青侍青女房
九十九 枚と合と之別
百一 物忌之札
百三 扇之的
百五 設生花
百七 神社湯立
百九 神支札
百十一 神前御燈
百十三 葬喪記
百十五 神前忌白扇
百十七 海童考
百十九 あいうえおと云支
百二十一 大和錦
百二十三 湯風呂鋪
百二十五 水干如木
百二十七 十干之傳
百二十九 五雲
百三十一 白楽天詩集
百三十三 詞之留字
百三十五 醫道祖

九十七 三国
九十九 青牙筯籤白牙筯籤
百一 侍士之字
百三 刀劔を折日取
百五 扇竹相
百七 釘隠
百九 盃之字
以上

百八 史記
百 振舞之儀
百一 帙
百三 菜越
百五 本式饅頭
百八 香物附夏



# 南嶺遺稿巻之一

## 秋齋桂先生著

門人 細谷文卿校

一 おもふに紙賣る蓑菜だにくみよ。ちくく作の棹よりけく。我八ツ六ツよりおびしくかへつり。こゝ東あくうよりいまれみく。流れ見まるよ。求ることもるよ。今尾張よ往ぐそかく法ふもろ和くい和く初まる。古夏記万葉集ゐも古く出くくの業味まる和まるん幕ゐるまるく用らま。多ちまるまるく用らまで俗例人も又かくの如し。昔い先祖をまるり其祖名を

おもむきとなる。一をぢ氏のこと神道と心得べし。天が下
山道なのこと撥るるか拘祈禱を先務とする。
あらたなる生の教より混じ。生活をのがれ居宗
儒の理屈より出でまし。的もなき教の字に拘せず。古金
の法なるかあらしなる。ちんぷんかんしき
紫色。古夏記日本書紀等より撥らむ。家伝祐伝
と号する貪私の偽作。公道より。何ぞ秘事あらん
深秘と云ふ夏三代実録より始まる見えたれども。灌頂
の深秘とあるく真云家のもの。神代巻を講ずる
輩深秘なくし。別席にて説法をい。新ぶる所を



貪ぶるの余り其餘あるべきに

二 大成経の神道者と云ふ。美濃國黒瀧の潮
音寺が何ぞ古く偽り傳へしもの取法なく。正
部二十八巻副部三十四巻合て七十二巻なり。
ものいひ聖徳太子の顕しぬる真の日事本記也
ぬ。扱露しなる。神代巻の細あるく偽出よ拾ふ。公傳ふ
山書の紙細を拾ふ。件の大成経幾所なるく。
上道箇の道の多とコノ何ともコノト訓じ作ふ文
多し。道をコノトなふ文い。宋朝以後の俗語の字
なり。聖徳太子の時代を異邦一箇の階小書ふ

く思ふべし。七十二巻ゝ小説撰の證論あるゝ
いつゝも小略しぬ。ゆゑ〳〵ふべし

(三) 日本小説てゝ日本の故實ゝ〳〵ゝ知べし。其第一第二神代巻
日本書記等能く知べし。其第一第二神代巻
なれば讀ゝ古の質實と可感。讀ゝ神道者と
成べし。祢宜神主は其職なる祭祀の禮を委く
学び知めゝおろそか成べゝ。神記はまゝ〳〵ゝ神
記は奇異をゝべゝ。祢宜の奴隷をゝゝ武士
のちゝやゝあゝゝはゝ世の捨ものゝ。武文其職を
かゝゝんゝ恥ざゝめや

(四) 梅花 春風 秋霜 菊花 紅葉 熟字 の字
入まゝゝゝべゝ。歌を出小かやゝの熟字はの字へゝゝん
人は賜ゝゝべし。又上の句文字ゝゝ出の句ゝ
ゝゝべし。下のゝゝ文字ゝゝ上のかゝら俗名ゝゝべし。
ゝゝゝも小俗名ゝゝは若ゝゝ上下ゝゝ出を裏名ゝ
ゝは出ゝゝ人のゝゝゝ也

(五) 拾遺集意の四
みなゝのあゝ名小船さゝあゝゝおゝ人ゝゝんゝ
上文字餘ゝの哥ゝゝゝ紙ゝ東小讀べし此欲之句は文
字全ゝゝ也。祢ゝゝゝ耳ゝゝゝ吾のゝゝゝを能ゝんゝ。

かやうのえんだ字讀事をえどは。文字餘りの訣りあるど
しむだるほしき也

（六）ちがやは茅草なるまば今俗にいふつばねそ。つばねは。
ちがやの轉じたるなるべし。真言天台の草座にち
かやを用ゆるも茅也。今萱は用ゆへあやまりなるべし
仏門に吉祥茅草とて。佛座とする事あり。さあれど
せくきれらちに佛の座といへもちいられるべし。佛座
さ海くに説あり古人も決しがたき況きいはんや茅
草なんとわがや。扨神事にかやを用ゆ。舊社の屋根
なども多く萱事萱をかりてふくはなしぬ事と



あげえしは證文あげつられし。やといふは草の惣名
おほく和名也。和名鈔地名部にも。大草をおほかやと
よませ。日本書記神代巻には。草野姫とあるは
かやのひめとよめり。諺に木の實草の実といふても知らず。
都く草萱あるは古来かやふきといふてよし。
又茅をとんつくちがやといふ神事に用ゆるも佛家に混
ぜしなる。吉祥茅草の餘風なりとおもゆ也。淺茅
なるどとものも此りなり

（七）鞍馬に武角鞍と云事古き文なり。園記といふ
書中に建暦年中伊豆の三島の社へ八幡太良の

陸奥の軍の図あり。又去年記の。阿保と秋山との不原軍の図あり。其法美仏法へ手向ふ様に強弱

(八) 和文の中者の字紙を変ず。チエレいとよを変ず。

此事ちと知る。拙ち明英宗實録よ。北秋

とむく時よ。明英宗討ひ出ちれしよ。北秋ちく

しく。英宗捕ちれ時よ北秋の長士卒ふ同ふ。英宗

中華の天子也。旦ふ。故ち海を下。

しふ時よ士卒ふ一同よ者者と答ふ。是唐

音ふく。チエレトふ也。又然の言も注も。又肥後

阿蘇言ふ。ちちふ。ちちふ。ちちふ。

者執達如件ふく。ふ。執達如件ふ。

ふく。チエレいとふ詞也

(九) 准后大納言親房卿の職原鈔を始く板なよ

ち。中原職忠後醍醐華庵のふ也。ふ前小野冨田

ふ。ふ。地下の官人ふ職原鈔ものあり。其法

ふ。ふ。一向不堪ふ。中原職忠中真のやふ

成く門人ふ職原鈔大全編ふ植木氏を始。其

法ふ。ふ。門流のふ。ふ。職原鈔限

の取法ふく全義解ふ。法ふ。法ふ事加賀

へ石抱ふ。平田氏も此例

十　壺井先生は平田氏の弟子なり。みづから語りし事ども。

我少き頃学問を好みしが、夜を徹して日夜つづけしが、そのころ人々十年夜を徹せんに人の廿年あるべしとて、そのころ霄の内をいさゝか眠ることなく、夜を日に継ぎ、官職の学問をもつぱら平田氏をふくみ、伝ひかゝるは或は用乾を傳るか、職原鈔の大全を秘蔵の書に取扱ひ、師家の紛を変じ古記を探り獨学みづから日々故實を得ては、おのゝ記録しふるの事叶ひがたし。故に官職の学問はかまびすしく、寄学神学をもとゝして吾国の故實只理ばかりの事也。仏ならば本末の化はなるべきを、ことゝ記録も目今の事の自由なるをもふ。

しこゝに乱根拔群の人出て吟味せらるゝ世上の官職者　其頃までい是を職原者と名高く門人もとびとゝ雖く学問もあるべき醫伎産業の稽古なるは故渡世にはしく夜学の燈燭よりも闇中よりも暗し。

あるゝ先生和語あり。性質方剛にして和よゆること。

大なりとも直ちにあらず。教へ僕ども中にも

ナロ來説ふる説ども紙注説問答抔しく書く出し。忘

きこえ侍るもありしうじもおのが学ぶ和たしうるし故郷の四方小郷也。公家方ハ第一なり。北下ハも事ら用ひ著を一朝の書或い板行し。或い秘し伝ふ。

物ゝ先生存生ハ京ハ六ハ別席を張。教授をハ平一人なりしかも弟子あるく師弟紙を表しるあり。

十一 或人の沛詣ハ富士の秋い隨分ゆくふるむが習ひ。古人の富士の秀絶いづれもゆゑ。奇い風雅を貴ぶ人ハ富士ばかりハ絶ゆしく。富士ハ東ふるハ日本の光りなりと。手ゝ下めく東へ

都人ハ一朝夜の間ゝ東海のそらゝ始く富士ハ見ゆ

ハ人ハ人ハ伝ふ富士の根の雲ハ人ハ雪種ハ

山二首或人沛詣ハ入ハ人ハ詣ハ者ハ

ハ者ハ。富士の奇ハ公清誰ハ

ゆくハ人ハ伝ハ。一真ハ

ハ人ハ富士の舟ハ

ハ幸ハ知ハ伝ハ

十二 或人の沛ハ行ハ和歌ハ変雨ハ

ハ雨ハ次第ハ色ハ出ハ赤き色ハ

和とゝ云もとゝ色をうしなうて。和紫の全和なるも。又黄和なるも。ゆゝしくめぐらし出みとゝ云ふを。書ふく讀べしとぞ。ふるゝ本いとみら少くも。いまゝ色はうぬい和紫はうみ雜し。稲荷の山のとみぐのあはうしと讀しい和紫をべきもの書きとゝ云ふ。ふく襖とゝ云ふ。ものよりもせく讀るものまゝ。搭別なるべ。後撰集秋下

一ちはやぶるかみの露なる玉田の山をとみ出るものゝ山ゝふく和紫ゝいもみ出るものゝ合点をべし。其山沼ふくゝみゝなるもみちの所ゝいつも題を應どべゝ

十三 和歌の會に用ゐる上文臺の事。ゝゝ和歌は限りゝ法和ふくゝなし。古來書物をゝくよりも基也。ゝゝ少全す法なきものゝ。左平記に。玄惠法印文臺まく書ゝ講ゝとゝ。今の見臺とゝ云ふ。後世の作ゝ也よく云ふたるものゝ。ゝゝあゝまいるきものゝ。文故伊藤氏ゝ見臺とゝ名の俗なる紙燭ひく櫛ゝと名ゝ。唐土の書ゝ斜ゝとゝ云ふ。文とのせゝなるもの。見臺のやうに仕ちゝなるものゝ。事物紀原ゝも見臺ゝ抄ゝきものゝ。幸ゝ。拾國ゝ古來文臺ゝく文をゝ。源氏和語和紫賀

美なるもみぢのむらぎえてうつろひたる。おなじの枝を折りて
ゐるへ。是をもみぢの葉ふく紙にうつす。取こしもとび
てたくさんとちらしたのはうつ。源氏の繪すく考きい。時よ
こうくもとび机を用ひ。和哥出るものをのせる基を
おびゝ作る。今世ふ柳笘ものい柳のむらし
つくへなるまきをもちゐる今の文臺のす法い後成ひ
うちまりは定家ひの明月記を見をうつ一条禪閤
明月記金紙の内より和歌の変ふかりうはなだりを
あたる上下二巻こし。明月記和哥の紙数〻祈〻
ゐふ。此中は文臺のす法もうをうつ。起〻〻和哥の事ふ

かゝるす法のうの。色紙。短尺。懐紙。大短尺。大色紙。懐
紙詠草の紙の種。宮信よりうくかゝる事。重硯墨硯
文臺。筆ホの軸のす法。短尺載ひ小柳笘。和歌の巻
扣棚。ちゞ紙うゞ色ぞ二十二品のす法うの是い別よ
ひ傳しく。す法の巻しをうたべきうう

十四 宗祇の家とう変波。今古今傳受ままくも
宗祇の家とい号せ。ひい和要所とう。仙洞御所よ
當今御所よ。御師範。清歌よ点を奉ひう
宗祇の家と号ひるうよ。今い加藤ひうとべく
宗祇の家とう号ひ。北下町人百姓和哥の弟子

こうく。家道と号とする。家あるを流がさし。和歌をこうくもまをとなるべし。一時一人のこのくに二人いあるべし。

故よりて今歩傳受の時も。一人い緩はせをこうる。家道と

ありくに。ふこ紀まぐ小ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。町人百

姓まくに和歌の家道といふ。能諸の点者の都をもて

をし。山家道こいふ受をもぐ。ぬ。ぬ。人

作はまし

（十五）短尺と云受。頓阿法師を後のこのみといふ説

あまたも。古来叙位除目のうち短尺申文といふ事あり。

紙をかくこうく官位を願ふ表を書付なり。御堂

関白激短尺申文の多くあり。或表返くく歌のこと也

のしりといふ受。清少納言の日記よりこう。短尺の名を

叙位除目のうちに来ある事なり

（十六）黄竹こうのいにしへ。歌を。詩の故

事を引く吉受。中古用ひぬ。ぬ。ぬ人あり。ぬ。ぬ

古来標中よ漢竹基呉竹基こうる。歌もれし

竹の世こを傳ふること讀くさのこ忘受ぬ

俗説よ極ぬ

（十七）懐紙こうのいに大昔いにしへの也。清和天皇の

比歌紙こいふのよみちをくを用ひこいふ受貞信公の

記を見てくらしと卯祭り双紙より引くらう。貞伝公い延喜前
後の人なり。清和天皇いまうおせの時分くかからせ
のふう卯祭の双紙くいつを一巻あるく作者まことに
いつくも。清少納言の枕双紙ぬもさしい卯祭歌うと
のせくしらうぱまやくのうのあるに。歌うとふい今の
九食のうふう鳥逃といつを言葉の餘風く。清堂の
図自撮新歌をたくらせ給ふを祝ぐるひとの也

(十八) 欲い調ふうの也かるが少よてふんとふくを大切よ
うるもぱ。ぱ不為ぐうをうくひぐくぱ。今の欲うみ作例
をうくく。誰の欲小かるてふくをたくひるとふ



類あり。まうくひとのくふ変をぬぐる説なり。唯
読あるくい作例まくすあくく。其歌の一解をそ不
旅象を吟味ぐ見ぐ。でわく傳の玄和欲
のうみくの書おほく見れ師をうぐくも作例と
不為ぐそいうるべ。まるぱ師をうくとふい其
毒一首の上わく批判を変ぐるく。批い章の善悪と
あくもるるわく。判い言葉ぐんを吟味する変なり。
此傳い十八ヶの墨譜のうくひくふるぱ。婦くせの
変くぱるくひくをあぱ。ぱ一字のひきくく風ぐ
とうくくを見ぐうとあり。此変ぐ無きまくく故ひ傳

ごとく武人より相傳し侍る

(十九)定家卿式子内親王と契りを結ばれ中絶て離
くなりし後讀て遣はされし歌

なげくとも恋ふともあはんみちやなき君かつらきの峯のしら雲

其後成てしれあらくる此定家世の憚もありしかば、いかん
ありしが此歌を傳へ見て。今かゝる憂ぬべからむごとくも思ひ
ごゝろまよひしかばにや、なりと御ほとりをかられしにや。されば此
歌親のいさめ世のそしりも、かへりみぬなるも。ふかき情
のほどなるにや。うちきこえたる所はさのみ格別なることも
なし。此歌はまことに情ふかきいひざま工夫しぬべきなり



恋の歌はやさしくあはれなるべし也

(廿)或人の作られし古歌を見るまゝによまれけるに心を
よせらるゝ。其見損じられし一首五句の内題恋れを
とらへと見付るが古歌の見所なりとく傳授し給ふ

續後撰集に。後白河院かくれさせ給ひて後の秋。良講
堂にまゐりて数寄を見たまひてある入道親王請仁

御風に誰を招く花すゝきこぞ見しやどの秋の夕暮

此歌の題恋之の句にあるやうなれども。これは下の句の歌
心をあはれしくて上の句にまくらことばをよみやすきなり。又
草庵集に

流るる世のあるかぎりこの関の戸は月新たなるべきなるし

此うたは足利尊氏卿督直義の二條の家にてよめるし歌

なり。一二三四五と次第ふるみたしなり。題意は二と四と

あるべく。一二四と中へ撰抜をくわへたる解なり。新古今集

より西行

ふるみたし高根の深雪解ふる清滝川の水のまさるは

ちかきより又下の句をよの句ゆえく秋しるる讀やうなり百人一首

ふるもふるとおよそ山橋なれるかよまるるもしれし

此分は二四六一二とよみくく題意は下の句あり其下の

句のかをよの句ゆえくまさるはくたるべきなるし



和田の原こぎいでくれば

題意をまつ上の句ゆえくとしを下ゆえ

まつびを調べる所也　此分は一二三四五六七八九

二三四五一とよみくさん題を山歌

題を二の句よりみくまつびを調べるこのく　きりも

題意をしの句ゆえくまつびを調べるこのく　きりも

なくや　秋の田のうかの　まさるは深くまさるし

此分は一二三四五と次第を変くく題意はゆえくの

次第ゆえくなるし　見渡せばさの山鳥の　遠波根のうち

なるおろす　山類　序歌とは新古今上代の一所上代

序とくくは題意なくあるべし今の所はあるべし

中納言撰の百人一首絵今宗匠家にて傳受(テンジュ)とする故
也。外の事あてはなし。然れ一首又自の和歌。新古今
共首ばく用新あり。そもそも絵合せて二百首へこれを
なるべく教授所が信受こがやうにおりてぞ分らぬ。やうなれども。
序歌二十首よりてば。此序歌と見てばる歌は序
分あり。これを相傳をなば百人一首の傳受なり也

南山頌遺稿巻之一　終


新増女諸禮錦　大本　金壹冊
仮綴紙形全二冊或
全二冊のもあり

書は女子たち学ぶ稽古の書にして婦人の道を説き客物通礼法の作法に果て庵丁茶番の作法諸物の図式
婚礼祝儀の式法用文書礼式おのおの作すべて女子礼儀の式法を演ぶ
集め各法と異して要く備へたまいぬ得あるべし浪花一世の名
詩の作法はおのおの三冊に入せ婚礼の作法もげに近世の
格別手寸寸手帳うるわしくゆたかなる作法を教ゆ清絵入所
板元書林　大阪心斎橋筋北へ入長町　河内屋太助　玄清
右は諸国いづくにても本屋にも出し一冊ずつなる音信なきこれ求めて